

シミュレーションの哲学としての梅園学

高
橋
正^{マサ}
和^{ヤス}

第一章 「序論」

『玄語』の哲学を「玄語図」と云う名前の特殊な図版に依って説明する作業は、三枝博音博士が名著『三浦梅園の哲学』を昭和十六年に「第一書房」から公刊して以来、各種各様の学者文化人達に依る各種各様の論文・著書が存在するにもかかわらず、ほとんど試みられていないのが現状である。

昭和四八年十月二七日に湯川秀樹博士が初めて九州の三浦梅園の旧宅を訪れた時の記録は、此の様な旧来の梅園研究の実態を歴史的重量感を以て認識する恰好の資料となるであろうから、現在の「梅園学会」の基礎となった「梅園研究会」の機関誌であった『梅園研究』の「創刊号」に湯川秀樹博士が投稿して下さった玉論「三浦梅園の旧居を訪れて」から、重要な部分を、以下に、其の煩を厭わずに挙示する事としよう。

なお、湯川秀樹博士の「梅園論」を「門外漢の素人談義にしか過ぎない・・・！」と批判する視野狭窄症の学者文化人がゴロゴロしているので、湯川博士の「梅園論」が決して「門外漢の素人談義」では無い外形的証拠を挙示しておくこととしよう。

角川書店から昭和六十年に刊行された『日本史探訪⑩』は、次の様な目次に依って構成されている。そして、ここに登場している人物達は、いづれも「日本文化史」を華麗に彩る学者文化人達であり、其の執筆者達が、いづれ劣らぬ碩学であつてみれば、「理論物理学」の第一人者である湯川博士も、「斯学」の碩学の徒に連なる学的水準に到達している事実は、容易に推断可能と云うものである。

目次

蘭学に没頭した「奇人」たち
洋学 事始

D・キーン
高橋石真一

実証的予防医学の開祖

貝原 益軒

杉 靖三郎

条理を唱えた自然哲学者
三浦 梅園

湯川 秀樹

明治維新の思想的指導者

頼 山陽

中村真一郎

時代に先んじた万能の天才
平賀 源内

吉田 光邦
樋口 清之

窮民を憂え乱を起こした役人

大塩平八郎

岡本 良一
中村真一郎

『解体新書』を作った蘭方医
杉田 玄白

小川 鼎三
吉村 昭

桜を愛した国学の大成者

本居 宣長

西郷 信綱

江戸末期の洋風画の先駆者
司馬 江漢

高橋石真一
細野 正信

麻酔手術の道を開いた医者

華岡 青洲

有吉佐和子
榊原 仟

畜社の獄に連座した洋学者

渡辺 華山

林 武
杉浦 民平

日本探求に賭けた青年医師

シーボルト

司馬遼太郎
緒方 富雄

弾圧に屈せぬ幕末の蘭学者

高野 長英

杉浦 民平
高橋石真一

幕末の人材を育てた蘭方医

緒方 洪庵

司馬遼太郎
緒方 富雄

(角川文庫・『日本史探訪⑬』より引用。)

三浦梅園の旧宅を訪れて

湯川 秀樹

昨年の秋、大分市で講演することになったのを機会に、前々からの念願であつた、三浦梅園の旧宅訪問を実現しようと思つた。大分から別府、杵築を経て、国東半島の東端に位置する安岐町にいたるまでの間は、別府湾の見える隠れる舗装道路で、車はひた走りする。

そこから先は、安岐川に沿つた細い路に変わる。降りやまぬ雨にぬかるむ路を車は幾曲りする。あまり険しくない山並を背景とする田園風景が、どこまでも続く。

人家はまばらである。路は緩やかな登り坂になっている。目指す方には、梅園が、終世、愛してやまなかつた両子山があつたはずだが、雨に煙つて姿は見えない。

車をおりて田圃路を少し歩くと、石段がある。数段の石を踏みのぼつて、平らな前庭に出た私たちは、茅葺の大きな平屋に向い立っていた。

正面の格子窓を境にして、左が玄関から表座敷、右が台所になっている。均整のよくとれた見事な構えである。

壁が淡紅色に塗ってあるので、やや派手な感じがする。

一生ここに隠棲して思索に耽っていた梅園には、この色は似つかわしくないように思われるが、あるいは腐蝕を防ぐために壁土に何かを混ぜたのかも知れない。もつと前の代から、そうだったのかもしれない。その点はどうとう聞きもらした。

真中の細かい格子窓のところは薬局になっていた由である。梅園は思索や著述のかたわら、祖父以来の医者となりわいも続けていたわけである。

そういう話を案内の人から聞きながら、自然と本居宣長の旧居・「鈴屋」を思い浮べた。梅園と同時代の人である宣長もまた、病人の診療・投薬もしながら国学を大成した。この二人の学問の内容は全く違うが、長年の間、ひとつの家を根城にして、根気よく仕事を続け、独創的な研究を成就した点は共通している。

玄関を入って表座敷に通ると、先ず床の間の肖像画が目につく。梅の枝を差した花瓶を前にして椅子に腰掛け

た姿は、温厚の君子、円熟した大人という形容詞が、そのままではまる。彼の内部にあったはずの強靱かつ執拗な探求精神は表に出ていない。彼の手製の天球儀がある。『玄語』など数多い著述の原稿が、ところ狭しと並べられている。三浦家の当主の義兄にあたる田口正治氏がいろいろと説明の勞をとって下さる。実は、二・三年前に田口氏の三浦梅園伝を読んで、改めて、高風を欽慕するようになっていたのである。

ふりかえてみると、近頃なくなった三枝博音氏が戦前に書かれた『三浦梅園の哲学』を繙いてから、どのくらいの年月が経過したのか、今はもう定かではない。ただ、その時には、梅園が日本では稀に見る独立独歩の思想家であったことが納得させられただけで、彼が『玄語』などで使っている「条理」とか「反観合一」とかいうことばの意味は、どうもよくつかめなかった。

ところが、ここに並んでいる原稿や、大正元年に刊行された『梅園全集』を開いてみると、「図」がたくさん出

てくる。まず、「白い円」と「黒い円」とが並べて描かれている。それを、例えば「氣」と「物」であるとする。次に、それらが「合一」して、「一つの円」になるが、その次には、その「円」の上半分が「白」くて「天」に対応し、下半分が「黒」くて「地」に対応する。そのまた次には、「円」の中が、もっと細かく分化する。

こういう「図」が、次から次へと続いてゆくのは、一

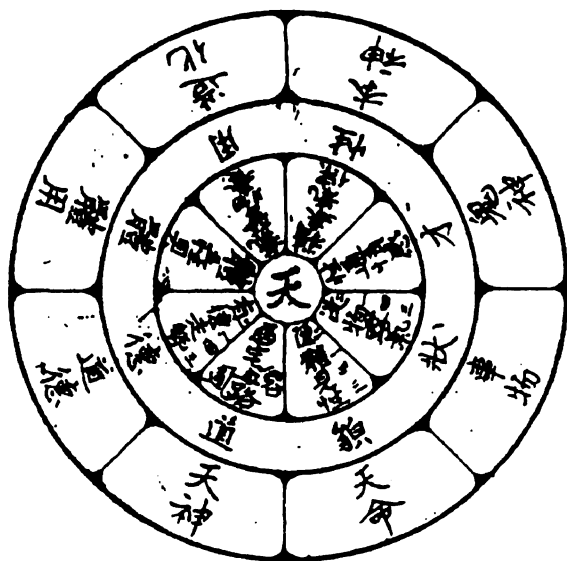
方では「反観合一」ということばで表現される、梅園の直感の自己発展の過程であると同時に、他方では自然界に内在する「条理」の追跡にもなっている。今まで茫漠としていた梅園の思想をつかむ手がかりが、そこにあると、私は直感した。

(『梅園研究』・創刊号より引用。)

第二章 「玄語圖」

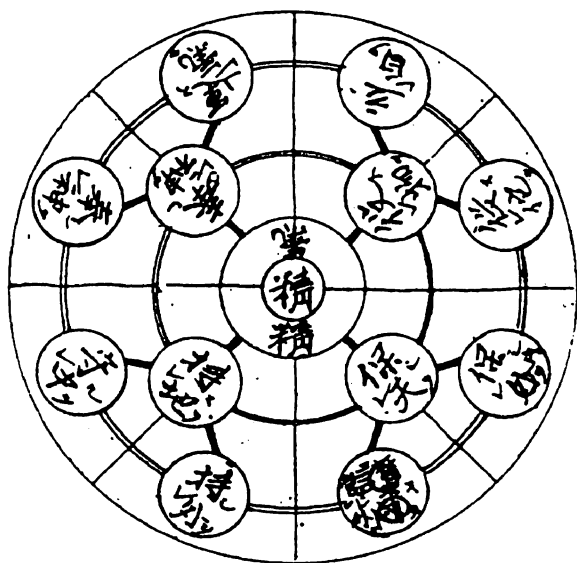
三二

天地爲成圖一合

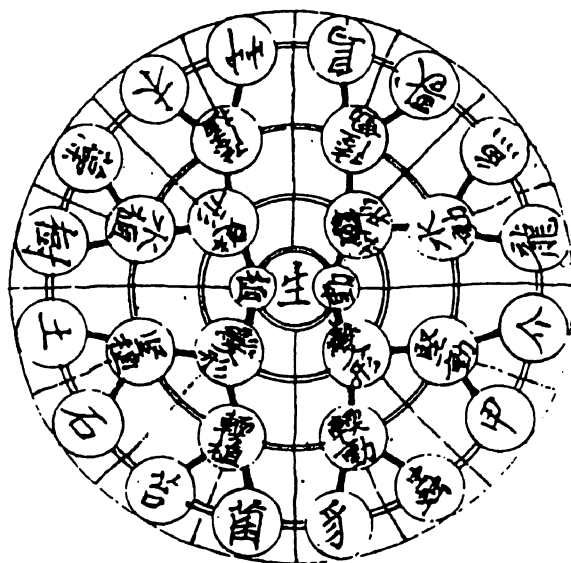
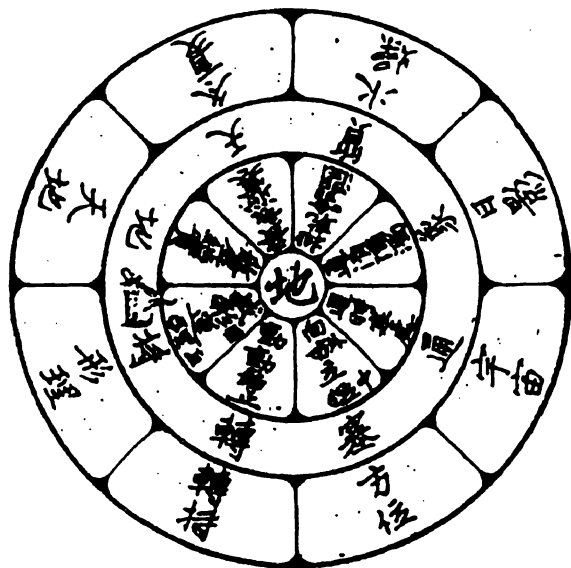


五一

保持奉運圖



動植分合總圖



一三〇

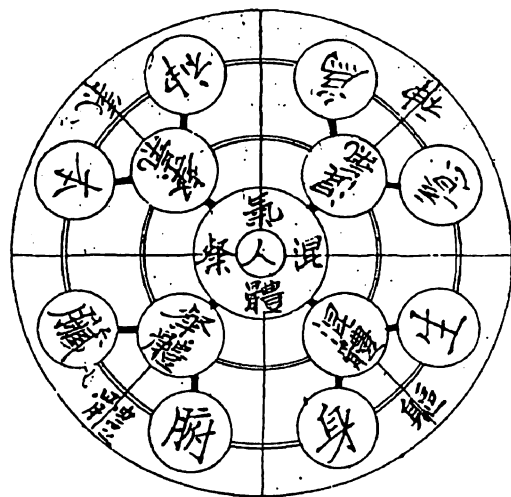
混氣體圖

與後，氣體圖一合，以觀神軀之全。



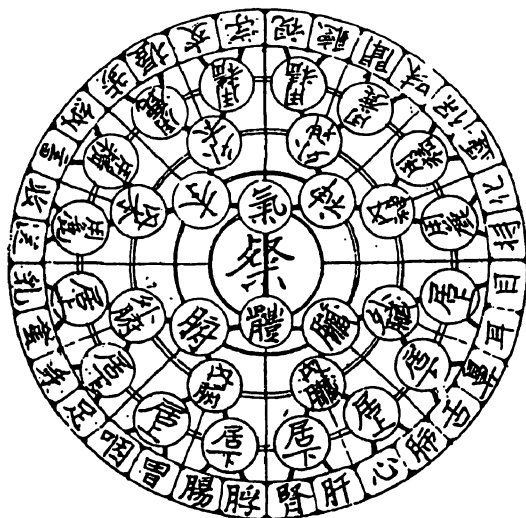
一三一

混氣體圖



一三三

祭氣體圖



一三三

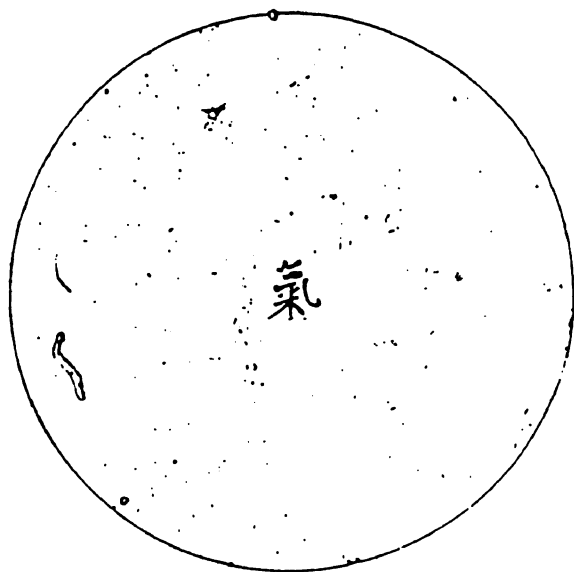
天人交接圖



一三六

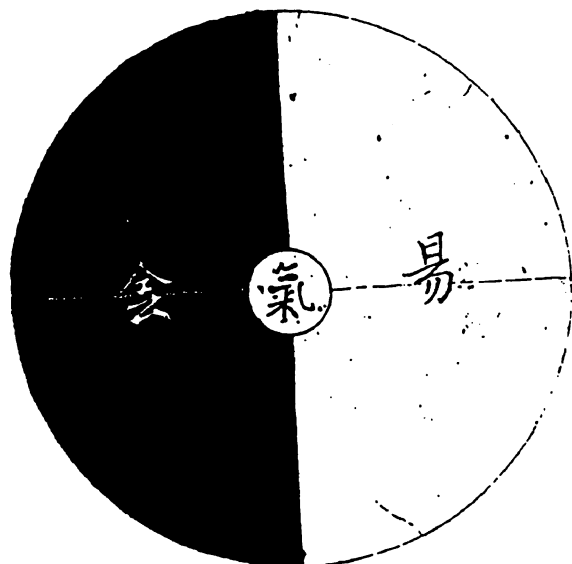
氣物相食混成圖一合

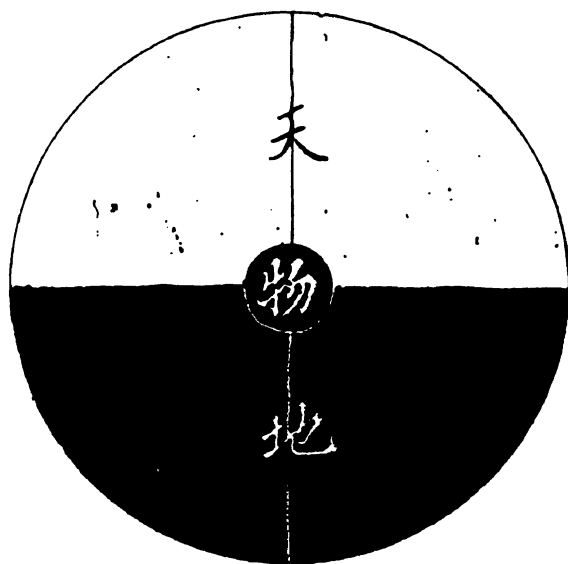
氣物即
習之反



一三七

一一相吐祭立圖



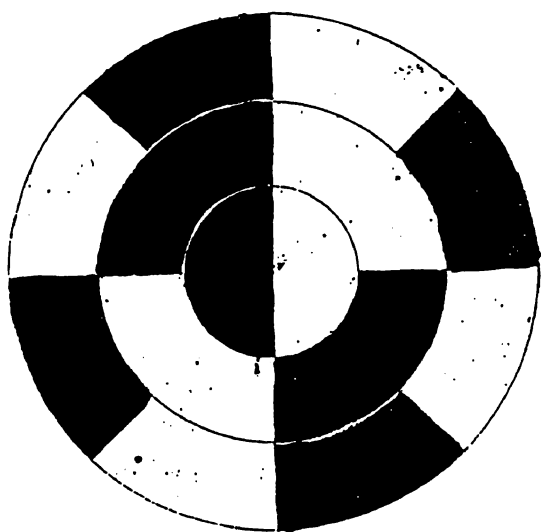


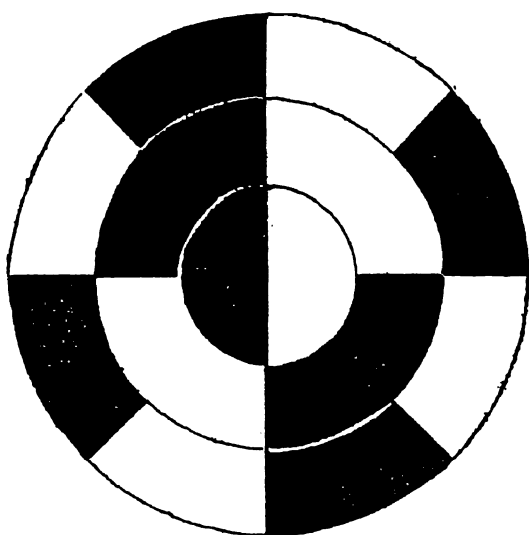
一三八

五氣物相吐祭五圖

一三九

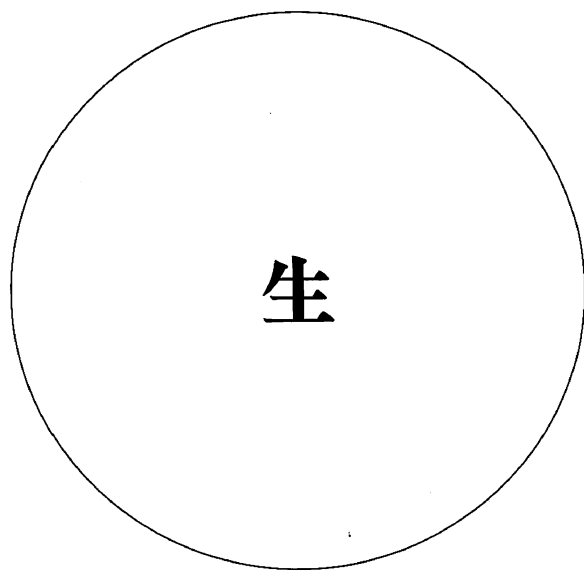
分合圖一合





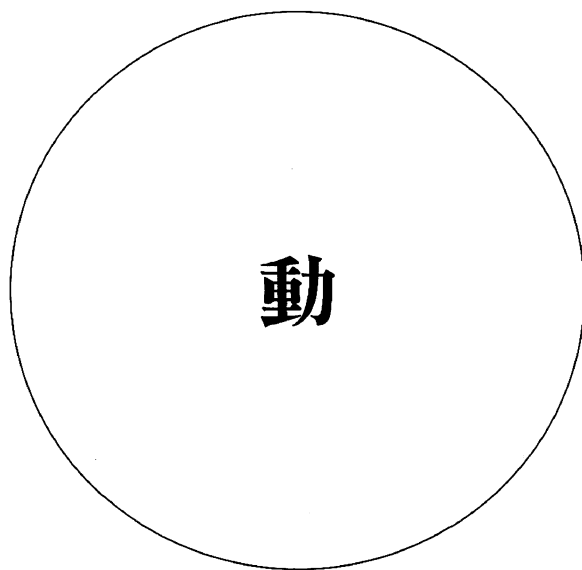
イ

生物図



口

動植相食混成図一合

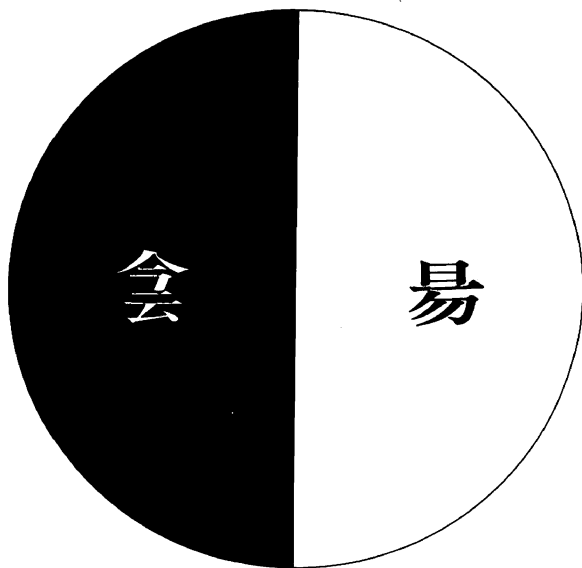




植

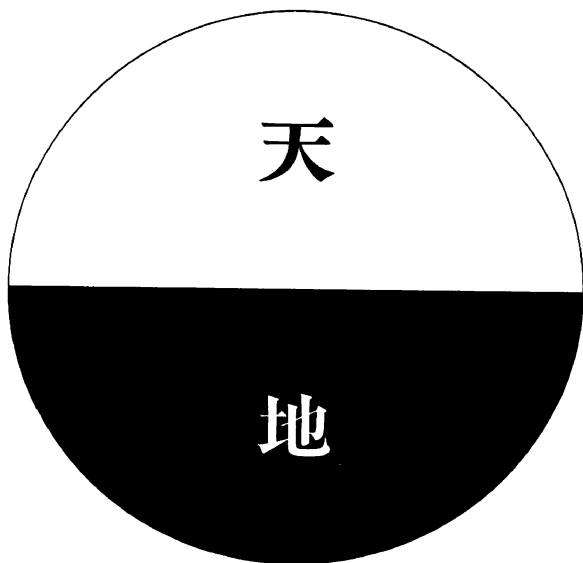
八

会易图



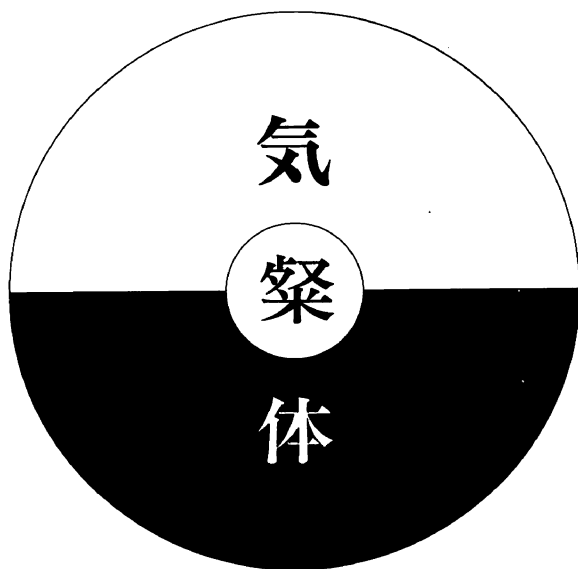
二

天地图



示

氣體相食混成圖一合



『玄語』の哲学は、一口で解説すれば、「二即二」「一即一」と云う構造を保有している「条理」と云う名の存在体系に依る「分類学」であると云う事が可能である。故に、梅園は旧来の学問体系を批判して、次の様に主張している。

「資料一」・「条理」ノ道ハ未ダ講ゼズ。見ニ従ヒテ名ヲ命ジ、意ニ随ヒテ類ヲ分カツ。是コニ於ヒテ、庶物ノ品類ハ、未ダ「条理」ニ合ツセス。

（『梅園全集』上巻・十三頁）

高橋沢

・（今日の学界に於いては、「条理学」と云う者は未だに講究されていない。（学者達は、諸物と諸現象に對して）手当たり次第の命名をし、「私意」即ち個人的見解に任せて分類する。其の為に、あらゆる物品の分類は未だに「条理」に叶っていないのだ。

島田沢

・条理の道が研究されないうちに、見るにしたがつて命名し、勝手な分類をしてきているので、諸物の類別が条理に合していない。

（『三浦梅園』・「日本思想大系」本・岩波書店刊・二十八頁）

註・「意ニ随ヒテ類ヲ分カツ」と云う原文を「島田訳」の様に「勝手な分類をしてきている」と翻訳する事が誤訳になる理由は、此の一節は「天人論」に係わるからである。つまり、「条理に叶っている」事が「天意」に叶っている事を意味し、「私意」は其の逆の立場であるからである。

註・「天人論」の具体例

イ、 「天人」ハ「同」ジカラズト雖モ、

而レドモ、其ノ「氣」タルハ、則チ、「同」ジ。

其ノ「氣」タルハ、則チ、「同」ジト雖モ、「意」ノ「有無」ヲ「反」ス。

故ニ、「天」ナル者ハ「無意」ニシテ、而シテ、「為」シ、「作」スコト無クシテ、而シテ、「成」ル。

「人」ナル者ハ「有意」ニシテ、而シテ、「為」シ、「作」シテ、 而シテ、「成」ラズ。

「物」ヲ以テ、之ヲ「分」テバ、

「天地山海」「艸木土石」ノ「意」ヲ「具」セザル者ハ、「天」ノ属ナリ。

「鳥獸魚鼈」「介蝦虫豸」ノ「意」ヲ「具」スル者ハ、「人」ノ属ナリ。

「事」ヲ以テ、之ヲ「分」テバ、

「無意」ニシテ「成」ルハ、「天」ノ「事」ナリ。

「有意」ニシテ「作」スハ、「人」ノ「事」ナリ。

「人」ハ此ヲ以テ「為」シ、

「天」ハ此ヲ以テ「成」ル。

「死生通塞」ナル者ハ「天」ナリ。

「殺活予奪」ナル者ハ「人」ナリ。

〔梅園全集〕上卷・一九一頁

只、「美醜」ハ、
「物」ニ在リ、「天」ナリ。

「美醜」ヲ「分」ツハ、「我」ニ在リ、「人」ナリ。

〔梅園全集〕上卷・一九八頁

ハ、「天人」ノ「反」スル所、「二」、以テ其ノ「分」ヲ「觀」、「二」、以テ其ノ「合」ヲ「觀」ル。

〔梅園全集〕上卷・二〇二頁

ニ、「天公」「人私」。「天誠」「人偽」。

〔梅園全集〕上卷・二〇二頁

ホ、「天人」ノ「給資」ハ、相ヒ「反」スレバ、則チ、

「我」ハ、則チ、「有限」ニシテ、

「天」ハ、則チ、「無限」ナリ。

「我」ハ、則チ、「須臾」ニシテ、

「天」ハ、則チ、「攸久」ナリ。

「我」ハ、則チ、「有意」ニシテ、

「天」ハ、則チ、「無意」ナリ。

へ、「天」ハ、「数」ヲ「為」シ、

「人」ハ、「之ヲ「数」フ。

「天」ハ、「[運轉]ヲ「有」シ、

「人」ハ、「之ヲ「曆象」ニス。

「天」ハ、「[親子]ヲ「為」シ、

「人」ハ、「之ヲ「尊卑」ニス。

「天」ハ、「[男女]ヲ「為」シ、

「人」ハ、「之ヲ「配偶」ニス。

「天」ハ、「[土壤]ヲ「為」シ、

「人」ハ、「之ヲ「都邑」ニス。

ト、「智」ニ、「明暗蔽悟」ノ無キコト能ハズ。

「利鈍賢愚」ノ生ズル所以ナリ。

「思」ニ、「公私誠偽」ノ無キコト能ハズ。

「善惡邪正」ノ分ルル所以ナリ。

「天人」ノ事、「反」シテ「合」ス。

（『梅園全集』上卷・二二〇頁）

チ、「人」ヲ以テ「天」ヲ「觀」レバ、「天」ハ「公誠」ニシテ、

「人」ハ「私偽」ナリ。

（『梅園全集』上卷・二二四頁）

そこで、梅園は『玄語』の著述目的と其の方法を、次の様に断言してみせるのである。

「資料」ニ・此ノ書ノ業ハ「条理」ニ在リ。杜撰ナリト雖モ、旧称無キ者ハ、新タニ名ヲ命ズ。類ヲ「分」ツ者ハ、専ラ「条理」ニ由ル。

（『梅園全集』上卷・十三頁）

高橋 訳

・此の書物の著述目的は「条理」的分類体系の確立に存在する。其の作業には杜撰なところが有るかもしれないが、旧名称の無い者には新しく命名をした。其の分類方法は専ら「条理」に依存した。

島田 訳

・本書の任務は条理にあるから、たとえ杜撰ではあっても、旧称のないものは新たに命名し、分類はもっぱら条理に由った。

(『三浦梅園』・「日本思想大系」本・岩波書店刊・二十九頁上)

此の「資料二」に所謂「新たな名」こそ、梅園が『玄語』の中で独創した所謂「条理語」である。そして、此の「条理語」に依る「球体世界」の再構成「図版」こそが、実は「玄語図」なのである。故に、「玄語図」は哲学的資源が無尽蔵に埋蔵されている幻の大陸みたいな存在なのである。

湯川博士が「三浦梅園の旧宅」を訪問された時に初めて此の「玄語図」を閲覧し、驚嘆した事実は、既に紹介した通りであるが、此の梅園が構想した「玄語図」の効用はどこに有るのであろうか。

此の点は、以下の論述を展開する以前に、少なくとも箇条的にでも承知していた方が便利であろう。そこで、以下に其の内の特徴的な側面だけでも管見しておこう。

イ、「実存」の球体的把握に便利である。

ロ、「実存」の「一即一」的「条理」的「繁立」的把握に便利である。

ハ、「実存」の「一一即一」的「条理」的「混成」的把握に便利である。

ニ、「表裏」「上下」「大小」「氣物」「性体」「会易」「天地」「時处」「没露」等の、あらゆる「視座」から「実存」を「即時的」に把握するのに便利である。

註、「視座の哲学」に関しては、拙著『三浦梅園』（明德出版社）を参照。

当該「論文」の執筆目的の第二点は、「人間が図で以て思索する時に於ける文字と図の關係の解明」である。そもそも、通常の「文字に依る思索」なるものが、より「時間的」であり、より「直線的」であるのに対して、梅園が独創した「玄語図」に依る思索の特徴は、より「空間的」、より「球体的」なものであるところに、其の特徴がある。故に、梅園は『玄語』の読法に関して、わざわざ「例旨」の中で次の様に述べている。

「資料三」・斯ノ『語』ヲ読ム者ハ、流ニ浜ルト流ニ沿フト、「左」ヨリスルト、「右」ヨリスルト、「中」ヨリ提グルト、「端」ヨリ起キルト、猶ホ「環」ノ、手ノ触ルル所ニ從ヒテ起転スルガゴトシ。

（『梅園全集』上巻・三頁下）

高橋訳 ・此の『玄語』を読む者は、『玄語』の文章を後から前へと文章の流れを遡って読もうとも、前から後へと文章の流れに沿って読もうとも、「左」の行から「右」の行へと文章を飛び飛びに読もうとも、「右」の

行から「左」の行へと文章を飛び飛びに読もうとも、文章の「中心部分」から「周辺部分」へと読み広げていこうとも、文章の「周辺部分」から「中心部分」へと読み縮めていこうとも、『玄語』の読み方ときたら、あたかも（フラフープの様な）円環状の物を、回転させる際に、手の触れる場所から自在に回転起点にする様なものである。

島田訳

・此の『玄語』を読もうとする者は、流れをさかのぼる、流れに沿う（てくだる）、左からする、右からする、中央から提げる、端から起こす、など、あたかも環が、どこでも手のふれるところを起点としてめぐりはじめるようなもので（どういう読み方をしてもよいので）ある。

（『三浦梅園』『日本思想大系』本・岩波書店刊・十三頁下）

此の様な『玄語』の読法は、実は、「大地が球体で有ると」云う、所謂「地球体説」とでも称すべき自然観の上に立脚しているのである。

読者はここで、一つの「地球儀」の存在を想定して頂きたい。現存の「地球儀」は南北両極点を貫通した地軸で固定されているので、「東回り」か「西回り」のいずれかの方向にしか回転させる事は不可能である。

しかし、仮に東西の両点を貫通した地軸で固定された「地球儀」を新たに作成せんとせんか、此の「新地球儀」は「南回り」か「北回り」のいずれかの方向に回転させる事が可能となる。そして、梅園の開発した論理は、此の「新地球儀」をも許容するのである。

註・イ、「人」ハ「小物」ヲ以テ、「短期」ヲ「得」、「実結」「彈丸」ノ如キ者ヲ「得」テ、之ヲ「踏」ム。

(『梅園全集』上卷・一〇九頁)

註・ロ、「天」ハ「瑠璃」ノ若ク、「地」ハ「彈丸」ノ若クナルニ由リテ、之ヲ「觀」レバ、「覆」フ者ハ「天」ト為リ、「載」ル者ハ「地」ト為ル。

(『梅園全集』上卷・一〇九頁)

註・ハ、「地」ハ「小円塊」ヲ為ス。

(『梅園全集』上卷・一二四頁)

註・ニ、「円」ナル者ハ、「円」ニシテ「円」ナリ。

其ノ「形」ハ「毬」ノ如シ。

(『梅園全集』上卷・一三二頁)

註・ホ、是ヲ以テ、「地」ハ「塊然」タル「一毬」ニシテ……。

(『梅園全集』上卷・一三三頁)

註・へ、「地体」ハ「一円球」ナリ。

『梅園全集』上巻・一四一頁

更に、解説を加えれば、『玄語』に登場している「玄語図」は、いわば無限数の地軸に固定され、其の故に無限数の方向に回転の選択肢を保有する回転体の瞬間的映像であるとも考え得るのである。

当該「論文」の執筆目的の第二点に対するいまひとつの答案として、私は、次の様な解説をも用意しておくことにする。

イ、「玄語図」の中に描かれている最小単位の円形を梅園は「小円」と称するのであるが、其の「小円」内に有る「文字」、例えば、辛島詢士博士の名著『玄語圖全影』所載の「図版番号一二七」に於ける「動植分合総図」の「動」とか「植」とかは、『玄語』於ける「文章」の最小単位である。

ロ、ところが、所謂「小円」の中に書かれている「文字」の大半は「動」「植」の例の様に「二文字」から構成されているのに対して、「二文字」以上から成る所謂「文」を構成するものが有る。例えば、「図版番号五一」の「保持奉運図」を参照して頂きたい。

「第一象限」の「役物」・「立自」・「役他」には、「物ヲ役ス」・「自ヲ立ス」・「他ヲ役ス」と読める様に「返り点」

と「送り仮名」が付されている。

「第二象限」の「保天」・「保内」・「営外」には、「天ヲ保シ」・「内ヲ保シ」・「外ヲ営ス」と読める様に「返り点」と「送り仮名」が付されている。

「第三象限」の「持地」・「持外」・「守中」には、「地ヲ持ス」・「外ヲ持シ」・「中ヲ守ル」と読める様に「返り点」と「送り仮名」が付されている。

「第四象限」の「奉神」・「奉神」・「運氣」には、「神ヲ奉ジ」・「神ヲ奉ジ」・「氣ヲ運ス」と読める様に「返り点」と「送り仮名」が付されている。

ハ、更に、読者は「図版番号三一」の「天地為成図一合」を参照されたい。此の「一合図」は「天図」と「地図」が「一一」的關係を構成しながら、一枚の袋綴の和紙の「表面」と「裏面」に描写されているのであるが、其の「天図」の「中心圈」に「天」と云う一字が有り、「第二圈」が八等分されている事実に気付くであろう。しかも、此の八個から成る「オニギリ」状の枠の中にも、先の例と同様に、「精奉氣保」・「性通情感」・「没物露氣」・「隠体見性」・「宅容路通」・「有徳走勢」・「体立性具」・「氣営物養」と云う四字熟語が記入されており、『玄語』の本文を参照すれば明らかな様に、それぞれ「精ヲバ奉ジ、氣ヲバ保ンズ」と読める堂々たる「文」であり、「性ヲバ通ジ、情ヲバ感ズ」と読める堂々たる「文」であり、「物ヲ没シ、氣ヲ露ス」と読める堂々たる「文」であり、「体ヲ隠シ、性ヲ見ハス」と読める堂々たる「文」であり、「宅ハ容レ、路ハ通ズ」と読める堂々たる「文」であり、「徳ヲ有シ、勢ヲ走ラス」と読める堂々たる「文」であり、「体ハ立チ、性ハ具ス」と読める堂々

たる「文」であり、「氣ヲバ営ナヒ、物ヲバ養ナフ」と読める堂々たる「文」である。

「文字」と「玄語図」との関係には、以上の様な面白い関係も存在する。此の事實は、『玄語』を中心とした従来の「三浦梅園の哲学」に関する研究が、概して「総論的」であるのに対して、より「各論的」に、其の論理展開の驥を細かく手繰る際に有効となる。

当該「論文」の執筆目的の第三点は、「文字からだけでは見えてこない図の領域の特性とはどのようなものであるか」と云う事を明らかにすることである。

ここでは、行文の都合上、以下に、其の答案の要旨のみを簡条書にするに止めておく。

イ、球体性

ロ、「一即一」的「一一即一」的「条理」性

ハ、「会即易」・「天即地」・「表即裏」・「上即下」・「没即露」・「隠即見」・「善即惡」等の「即否の論理」

ニ、「混成性」即「繁立性」

ホ、「図」的表現の無限性

そこで、以下に、第三章では「図版番号一二七」の「動植分合総図」を中心にして、第四章では「図版番号一三二」

の「察気体図」を中心にして、「存在論」としての「条理」を説明し、第五章の「反観」と第六章の「合観」では「認識論」を説明することにする。

第三章 「動植分合総図」

「条理学」的分类体系の中で、我々にとって最も理解し易い者は、「図版番号一二七」の「動植分合総図」であろう。作図方法としては、中心圏の「生」のみを残して他の全ての概念を抹消してしまった「図版番号イ」の様な「生物図」とでも称すべき「図版」を新しく作成し、次に「図版番号三」の「氣物相食混成図一合」の「氣」の代りに「動」即ち「動物」を、「物」の代りに「植」即ち「植物」を記入した「図版番号ロ」の様な「動植相食混成図一合」とでも称すべき「図版」を新しく作成し、更に、「図版番号一三七」の「一一相吐繁立図」の「中心圏」に有る「氣」と云う概念を抹消し、「図版番号ハ」の様な「会易図」とでも称すべき「図版」を新しく作成し、「図版番号一三八」の「氣物相吐繁立図」の「中心圏」に有る「物」と云う概念を抹消し、「図版番号ニ」の様な「天地図」とでも称すべき新しい「図版」を作成してみるが良い。

次に、此の「生物図」と「動植相食混成図一合」と「会易図」と「天地図」を重ね合わせると、「生物」と云う「境域」に於ける「一一即一」的に混然と円成した統一態が我々の脳裏に浮かんで来るであろう。此の「玄語図」の重ね合わせ作業の事を、私は「シミュレート」と定義し、そこに新しく生まれる「三浦梅園の哲学」を「シミュレーション」の哲学としての「梅園学」と命名してみたのである。

何故に、此の様な「シミュレーション」に興味を抱いたかと云えば、実は、此の混成作業こそ、「実存」を実存のままだに把握する優れた方法であると、梅園は信じていたと考えられる様になったからである。

梅園は『玄語』の中で、次の様な興味深い指摘をしている。

「資料 三・「物」ハ「網縊」ノ「間」ニ、擾々タリト雖モ、亦タ唯々

「二動一植」ノミ。

「二動一植」ハ、是レ、コレヲ「生」ト謂フ。

「生」ハ、「物」ヲ「動植」ニ分ツ。

（『梅園全集』上巻・一五二頁）

高橋訳 ・「万物」は「氣」が「一一」的に「網縊」する世界の中にごろごろと存在しているけれども、「一

一」的關係を構成する動物と植物とだけである。

故に「一一」的關係を構成する動物と植物の統体の事を「生物」と称する。

島田訳

・物は網縊の間に擾々たりといえども、要するにただ一動物一植物である（鉱物は植物の特別な場合）一動一植、それを生（生物）という。生は物を動物と植物に分かつ。

（岩波・『日本思想大系本』・『三浦梅園』・二〇二頁）

註・イ、「万物」ノ擾々タル、以テ「反」シ、以テ「依」ル。

夫レ、「物」ノ相ヒ「散」ズルヤ、万不同ナリト雖モ、「天地」「水火」、其ノ「化」スル所ハ、
惟ダ「一動一植」ノミ。

（『梅園全集』上巻・二〇一頁）

高橋 訳

・ごろごろと存在している「万物」は、互いに「反偶」の関係を構成し、互いに「比偶」の関係を構成している。

そもそも、「万物」が相互に（「一一」的關係を保有しながら）「分散」している其の様態は、万物万様に其の様態を異にしているが、「天地水火」の境域に於て、そこに「生化」する物は、惟だ「一一」的關係を保有する「動物」と「植物」のみである。

島田 訳

・万物は擾擾として、反し且つ依っている。

そもそも物のあい散ずるのは方に不同（千差万別）であるが、（要するに）天地水火であり、その（化生する、生ぜしめる）ところも、動物と植物に他ならない。

（岩波・「日本思想大系本」・「三浦梅園」・二六三頁）

註・ロ、「濁境」ニ之レ「並立」セルハ、「一動一植」ナリ。

「天」ニ於テハ、則チ、同ジク「資」リタリト雖モ、而レドモ、「物」ニ於テハ、則チ、「分」ツコト有リ。

「植」ニ於テハ、則チ、「運用」ヲ「無意」ニ「給」シ、「動」ニ於テハ、則チ、「運用」ヲ「有意」ニ「給」セラル。

（『梅園全集』上巻・二一六頁）

高橋沢

・「濁」的「境域」に「並立」している「物」は、「一一」的な「条理」關係を保有する「動物」と「植物」である。……。

島田沢

・濁境にはひとつは動物、ひとつは植物が並立している。……。

（岩波・『日本思想大系本』・『三浦梅園』・二八九頁）

註・ハ、

「小物」ノ「大分」ハ、廻チ、「一動一植」ノミ。

是ニ於テ、「植」ノ「無意」モ「天」ニ「異」ナルコト有リ。

「動」ノ「有意」モ「人」ニ「同」ジキコト有リ。

（『梅園全集』上巻・二二二頁）

高橋沢

・「小物」に於ける「大区分」は、「一一」的な「条理」關係を保有する「動物」と「植物」のみである。……。

島田訳 ・ 小物の大きな区分は、動物・植物である。・・・。

（岩波・『日本思想大系本』・『三浦梅園』・二九六頁）

註・二、故ニ、「物」ハ芸芸然タリト雖モ、亦タ、惟ダ「一動一植」ノミ。

（『梅園全集』上巻・二五九頁）

高橋訳 ・ 故に、「万物」の存在態ときたら芸芸然としているけれども、此れも亦た、「一一」的な「条理」

關係を保有する「動物」と「植物」だけである。

島田訳 ・ ゆえに、物は芸芸然たりといえども、要するに動物と植物とにすぎないのである。

（岩波・『日本思想大系本』・『三浦梅園』・三四七頁）

「資料三」に続けて、梅園は次の様に云う。

「資料四」 ・ 居ヲ「水燥」ニ分チ、地ニ「資」リテ以テ生ズルヲ以テ、「体」ニ「堅軟」有リ。「体」ヲ以テ「生」

ニ乗ジ、「堅植」ト曰ヒ「軟植」ト曰ヒ、「堅動」ト曰ヒ「軟動」ト曰フ。

〔梅園全集〕上卷・一五二頁

高橋 訳

・居住場所即ち生息地を「水燥」即ち水中と空中とに分割し、大地から養分を吸収するが為に、其の身体の在り方に「堅い身体」と「軟い身体」が存在する。そこで、「身体」が「生命」にシミュレートした結果を見て「堅い植物」と云い「柔い植物」と云い、「堅い動物」と云い「柔い動物」と云う。

島田 訳

・居を水・燥に分つ。地に資りて生ずるがゆえに体に堅と軟があり、体を以て生に乗じて（くみ合わせて）、堅植物、軟植物、堅動物、軟動物という。

（岩波・『日本思想大系本』・『三浦梅園』・二〇二頁）

註・イ、蓋シ、「苔菌虫豸」ハ「余生」ナリ。

「余生」ハ「水陸」ニ各々有リ。

同ジク是レ「虫」ナリト雖モ、「一」ハ則チ、「堅体」ニシテ、

「二」ハ則チ、「軟体」ナリ。

同ジク是レ「豸」ナリト雖モ、「一」ハ則チ、「脚」ヲ「用」ヒ、

「二」ハ則チ、「脚」ヲ「去」ル。

〔梅園全集〕上巻・二五二頁〕

高橋沢 ……。同様に「虫」の範疇に分類されてはいるが、「堅体」の「虫」と「軟体」の「虫」は、「二」的な「条理」関係を保有していて、「二」関係の内の一方の「一」は「堅体」に所属し、「二」関係の内の他の一方の「二」は「軟体」に所属している……。

島田沢 ……。おなじく虫でありながら、一は堅体、一は軟体……。

〔岩波・「日本思想大系本」・「三浦梅園」・三四一頁〕

註・ロ、「水陸」ノ「艸木鳥獸」ヲバ、之ヲ「本生」ト謂フ。

〔梅園全集〕上巻・二六九頁〕

「資料四」を「動植分合総図」に依つて解説すると次の様になる。読者は「第四圈」を参照されたい。そこに「水動」「陸動」「水植」「陸植」「堅動」「軟動」「堅植」「軟植」と云う八種類の「球体世界」が描出されている事実気付くであろう。そして、此の八種類の「球体世界」の内の「水動」「陸動」「水植」「陸植」の四種類を二種類に統合する「水陸」こそ、実は「資料四」に於ける「水燥」の別表現である。また、此の八種類の「球体世界」の内の「堅動」

「軟動」「堅植」「軟植」の「堅軟」こそ、実は「資料四」に於ける「堅動」「軟動」「堅植」「軟植」の事である。

次に、読者は「第五圈」を参照されたい。そこに「艸木鳥獸」「魚竜藻樹」「虫豸菌苔」「土石介甲」と云う四種類の「球体世界」が描出されている事実に気付くであろう。もっと正確に表現すれば、「艸」「木」「鳥」「獸」「魚」「竜」「藻」「樹」「虫」「豸」「菌」「苔」「土」「石」「介」「甲」と云う総計十六種類の「球体世界」が描出されている事実に気付くであろう。

「艸木鳥獸」の四種類の「球体世界」の中に包含される具体的な動植物の種類として『玄語』の中にしばしば登場するものには次の様な種類が有る。

イ、「艸」・野びる（二五一頁）・

ロ、「木」・牡丹（二五一頁）・松（二五二頁）・柏（同頁）・梅（同頁）

ハ、「鳥」・鸚鵡（二六九頁）・

ニ、「獸」・牛・馬・羊・犬・猫・虎・

「魚竜藻樹」の四種の球体世界の中に包含される具体的な生物の種類として『玄語』の中にしばしば登場するものには次の様な種類がある。

イ、「魚」・河豚（二五〇頁）・鮫（同頁）・比目（二五一頁）

ロ、「竜」・蛇（二五二頁）・守宮（同頁）・蜥蜴（同頁）

ハ、「藻」・昆布（二五二頁）・黒目（同頁）・

ニ、「樹」・珊瑚樹（二五二頁）・

「虫豸菌苔」の四種の球体世界の中に包含される具体的な生物の種類として『玄語』の中にしばしば登場するものには次の様な種類がある。

イ、「虫」・蟬・蚊（二六九頁）・蠅螂（二六九頁）・

ロ、「豸」・

ハ、「菌」・

ニ、「苔」・

「土石介甲」の四種の球体世界の中に包含される具体的な生物の種類として『玄語』の中にしばしば登場するものには次の様な種類がある。

イ、「土」・

ロ、「石」・

ハ、「介」・蝸牛（二五二頁）・夜啼（同頁）

ニ、「甲」・亀（二五二頁）・蟹（同頁）

さて、これだけの下準備を整えた上で、難解を以て鳴る『玄語』の中から「生物」に関わる幾つかの文章を以下に引用し、其の解説方法を演習して御覧にいれよう。

「資料五」 ・「小物」ノ大分ハ、即チ「一動一植」ナリ。是コニ於テ、

「植」ノ「無意」ハ「天」ニ異ナルコト有り。

「動」ノ「有意」ハ「人」ニ同ジカラザルコト有り。

（『梅園全集』上巻・二二二頁）

高橋 詠 ・「小物」の世界を（「一即二」の「条理」に従つて）二大分すると、「二」的關係を構成する「動物」と「植物」に分類される。「植物」には「意」と云うものが無いが、「天」の「無意」性とは

おのずから相違点がある。「動物」には「意」と云うものが有るが、「人」即ち人間の「有意」性とはおのずから同一では無い点がある。

島田 詠 ・小物の大きな区分は、動物・植物である。それで、植物の無意は、天の（無意）と異なる点があ

り、動物の有意も、人と同じくない。

(岩波・「日本思想大系本」・『三浦梅園』・二九六頁)

此の「資料五」を、今少し正確に理解する為には、「小物」と云う聞き慣れない「条理語」を理解する事から始める必要が有る。梅園は『玄語』の中で、「小物」は「大物」と「一一」的關係を構成するものとして構想していた。そして、「大物」とは「天地」即ち「大自然」であるのに対して、「小物」とは地球上の存在物の事である。

次に難解な「条理語」は「意」である。此れを理解するには「図版番号一三〇」の「混気体図」の「第四象限」を参照すれば良い。此の「図版」の「第六圈」に展開されている「思慮知弁」「愛憎欲惡」を参照しさえすれば、『玄語』に於ける「意」と云う概念のおよその意味は理解出来る事であろう。

註・イ、故ニ、「大物」ハ「天地」ナリ。

「小物」ハ「動植」ナリ。

(『梅園全集』上巻・二五九頁上)

註・ロ、「天地」ナル者ハ「大物」ナリ。

「万物」ナル者ハ「小物」ナリ。……。

「万物」ハ「万天地」ヲ有シテ、各々、「大物」ト「勢ヲ張」ル。

〔梅園全集〕上卷・二三九頁

註・ハ、〔大物〕ハ 〔央々〕ニ「居」リテ、〔衰々〕ニ「從」フ。

故ニ、〔小〕モ亦タ「天地」ニ「居」リテ、〔節序〕ニ「從」フ。

〔梅園全集〕上卷・二五八頁

註・ニ、〔大物〕ノ「成」ルヤ、〔神一物〕ナリ。

〔物〕ハ「天地」ヲ「開」キ、〔神〕ハ「天神」ヲ「開」ク。

〔天地〕ナル者ハ「地物」ニシテ「天氣」ナリ。

〔天神〕ナル者ハ「神物」ニシテ「天氣」ナリ。

〔梅園全集〕上卷・五八頁

註・ホ、〔大物〕ハ能ク「有」シ、〔万物〕ハ能ク「開」ク。

〔有〕スル者ハ能ク「給」シ、

〔開〕ク者ハ能ク「資」ル。

〔梅園全集〕上卷・二〇一頁

註・へ、蓋シ、「大物」ハ能ク「統」べ、「小物」ハ能ク「散」ズ。

「統」ブルハ則チ、「混有ノ天地」ニシテ、
「散」ズルハ則チ、「各立ノ氣物」ナリ。

〔梅園全集〕上卷・二〇一頁

註・ト、「意」ナル者ハ、「人」ノ得テ有スル所ノ「德」ナリ。

〔梅園全集〕上卷・一九二頁

註・チ、「意」ノ「有無」ナル者ハ、「天人」ノ「分」ナリ。

「天人」ハ「氣」ヲ「同」フス。

而シテ、「人」ナル者ハ、「有意」ニシテ「作」ス。

「天」ナル者ハ、「無意」ニシテ「為」ス。

〔梅園全集〕上卷・一九六頁

註・リ、「無意」ナル者ハ、「天德」ナリ。

「人」ヲ以テ之ヲ「觀」レバ、則チ、「公」ナリ。……

「天」ヲ以テ之ヲ「觀」レバ、則チ、「私」ナリ。

〔資料六〕

・「水陸」ノ「艸木鳥獸」、之ヲ「本生」ト謂フ。

「水陸」ノ「虫豸菌苔」、之ヲ「余生」ト謂フ。

「本生」ハ「条理ノ正」ヲ守リ、「余生」ハ「条理ノ變」ヲ尽ス。

・・・是ヲ以テ、「鳥獸」ハ「正形」ニシテ、「鱗甲」ハ其ノ「變」ヲ尽ス。

〔梅園全集〕上卷・二六九頁

高橋 訳

・水陸に生息する「草木鳥獸」の事を「本生」と謂う。水陸に生息する「虫豸菌苔」の事を「余生」と謂う。「本生」は「条理」の秩序を守備し、「余生」は「条理」の変化を尽くす。

島田 訳

・草木鳥獸を本生（オーソドックスな生物）といい、虫豸菌苔を余生（非オーソドックスな生物）という。本生は条理の正を守り、余生は条理の変を尽くす。

（岩波・「日本思想大系本」・「三浦梅園」・三六一頁）

註・イ、蓋シ、「苔菌虫豸」ハ「余生」ナリ。

「余生」ハ「水陸」ニ各々有リ。

註・口、「鳥獸」(「本生」)ハ、「声技」無キ者、少ナシ。

「余生」ノ若キニ至リテハ、

「羽類」ニ「声」無キ者ノ有リ。有レバ則チ、之ヲ「羽」ニ発ス。

「多類」ニ「声」無キ者ノ有リ。有レバ則チ、之ヲ「喉」ニ鼓ス。

『梅園全集』上巻・二七七頁

此の「資料六」を、今少し正確に理解する為には、改めて「動植分合総図」を参照する必要がある。此の「資料」の中で使用されている「本生」と「余生」と云う概念も、実は所謂「条理語」であるが、「動植分合総図」に所謂「本形」と「変形」が其れに相当する。故に、読者は「動植分合総図」の「本形」と「変形」の球体世界に、それぞれ「本生」と「変生」と云う「条理語」を代入しさえすれば、此の「資料六」を解読する際に便利を感じる筈である。「玄語図」を正確に理解する為には、実は、此の様な代入法の活用がしばしば要求される事を注意しておこう。

「資料七」 ・「動」ト「植」トハ、本ト同ジク「生」ナリ。・・・。

「植」ハ「地」ニ「著」シテ「堅立」シ、・・・。

「動」ハ「地」ヲ「離」レテ「横行」ス。

高橋 訳 ・「動物」と「植物」は、本来的には、ともに「生物」である。・・・

「植物」は、大地に付著して、縦の方向に立ち、

「動物」は、大地から離れて、横の方向に移行する。

島田 訳 ・動物植物はもと同生のもので（同じく生物で）あるが、・・・植物は地に着いて豎立し、・・・。

動物は地を離れて横に行き・・・。

（岩波・『日本思想大系本』・『三浦梅園』・三六九頁）

今一つ、次の様な二種類の「資料」と「動植分合総図」を同時に参照して頂きたい。

「資料八」 ・「虫」ニ「飛」ト「走」ノ「二」有り。

「飛」ハ「虫」ト云ヒ、

「走」ハ「豸」ト云フ。

（『梅園全集』上巻・一四頁）

高橋訳 ・ 虫類には、（其の運動様態に依って）二種類が有る。飛行する「虫」の事を「虫」と云い、走行す

る「虫」の事を「彡」と云う。

島田訳 ・ 虫には飛と走の二がある。飛の方を虫といい、走の方を彡という。

（岩波・『日本思想大系本』・『三浦梅園』・二九頁）

「資料九」 ・ 「堅動」ハ「軟動」ノ「飛走」ヲ仮ラズ。

（『梅園全集』上巻・二七五頁）

高橋訳 ・ 「堅動」は「軟動」の様に飛行したり走行したりしない。

島田訳 ・ 堅動物は、軟動物のように飛走を借りる必要はない。

（岩波・『日本思想大系本』・『三浦梅園』・三六九頁）

「資料八」に依れば、「動植分合総図」の「第二象限」に展開されている「軟動―虫・彡」の運動様態に依る更なる分類が可能となり、「資料九」に依れば、「堅動」と「軟動」は運動様態と云う「視座」から展望した場合、紛れもなく「一即一」的關係を構成している事が理解されるであろう。

第四章 「聚氣體図」

「条理学」的分類体系の中で、我々に取って次に理解し易い者は、「図版番号一三二」の「聚氣體図」であろう。作図方法としては、「図版番号一三六」の「氣物相食混成図一合」の「氣」の代わりに「聚氣體図」の「第二圈」に有る「氣」を、「物」の代わりに「聚氣體図」の「第二圈」に有る「體」を代入して、「図版番号ホ」の様な「氣體相食混成図一合」とでも称すべき「図版」を新しく作成し、更に、「図版番号一三七」の「一一相吐聚立図」の「中心圈」に有る「氣」と云う概念を抹消し、「図版番号ハ」の様な「含易図」とでも称すべき新しい「図版」を作成し、「図版番号一三八」の「氣物相吐聚立図」の「中心圈」に有る「物」と云う概念を抹消し、「図版番号ニ」の様な「天地図」とでも称すべき新しい「図版」を作成し、「図版番号八」の「一一精麁図」の「精」の代わりに「天」を「麁」の代わりに「地」を代入した「一一天地図」とでも称すべき新規の「図版」を作成してみるが良い。

次に、此等の「氣體相食混成図一合」と「含易図」と「天地図」と「分合図一合」と「一一精麁図」と「一一天地図」を重ね的に重ねると「一一即一」的に混然と球體的に円成した統一體としての「実存」を実存のままに把握する事が可能なのである。

梅園は人間の实存を「図版番号一三〇」の「混氣體図」の「中心圈」に位する「人」と云う概念で表徴しようと試みた。そして、此の概念こそ、実は統一體としての「人間」の事なのである。次に、「第二圈」に「一一即一」的に展開している「神」と「軀」は、「精神」と「肉体」の事である。そして、此の「第四章」で問題にしようとしている「臟

「腑」は、実は、「図版番号一三〇」の「混気体図」の「第三象限」と「図版番号一三二」の「榮気体図」を参照する事に依つて明らかになるのである。

梅園は、人間の「肉体」と「精神」を「一即二」の「条理」に従つて次の様に解説している。

「資料二」・「軀」ハ「身生」ヲ以テ「立」ス。而シテ、「生」ハ則チ「気液」ニシテ、「身」ハ則チ「骨肉」ナリ。

「氣」ナル者ハ「二温一動」ナリ。而シテ、「温」ニ「營衛」有リ。

「動」ニ「息脈」有リ。

「液」ナル者ハ「二血一膏」ナリ。而シテ、「血」ニ「津血」有リ。

「膏」ニ「脂髓」有リ。

「肉」ナル者ハ「二臟一腑」ナリ。而シテ、「臟」ト「腑」トハ、各々「内外」ヲ分ツ。

「骨」ナル者ハ「二筋一骨」ナリ。而シテ、「筋」ト「骨」モ亦タ「内外」ヲ分ツ。

「混氣」ハ則チ「神」ナリ。

「神」ハ「意為」ヲ以テ「成」ス。而シテ、「意」ハ則チ「心性」ナリ。

「為」ハ則チ「為技」ナリ。

「心」ナル者ハ「一意一智」ナリ。而シテ、「意」ニ「思慮」有リ。

「智」ニ「知弁」有リ。

「性」ナル者ハ「一情一慾」ナリ。而シテ、「情」ニ「愛憎」有リ。

「慾」ニ「欲惡」有リ。

《梅園全集》上卷・二六一頁

高橋沢

・「神軀」の「軀」は（一一）的關係にある）「身」と「生」とで以テ成立している。そして、「生身」の「生」は（一一）的關係にある）「氣」と「液」の（一一即一）的關係に依る）混成態である。

「生身」の「身」は（一一）的關係にある）「骨」と「肉」の（一一）的關係に依る）混成態である。

「氣液」の「氣」と云う者は「一一」的關係を構成する「動」と「溫」である。そして、「溫動」の「溫」には「營」と「衛」が含有されていて、「動」には「息」と「脈」が含有されている。

「氣液」の「液」と云う者は「一一」的關係を構成する「血」と「膏」である。そして、「血膏」の「血」には「津」と「血」が含有されていて、「膏」には「脂」と「髓」が含有されている。

「骨肉」の「肉」と云う者は「一一」的關係を構成する「臟」と「腑」である。そして、「臟腑」の「臟」と「腑」は、各々、「内」と「外」に分割される。

「骨肉」の「骨」と云う者は「一一」的關係を構成する「筋」と「骨」である。そして、「筋骨」の「筋」と「骨」も亦た「内」と「外」に分割される。

〔榮氣〕に対する〕「混氣」は則ち「神軀」の「神」である。「神」は（一一）的関係を構成する）「意」と「為」で以て構成され、そして、「意」は（一一）的関係を構成する）「心」と「性」である。「為」は（一一）的関係を構成する）「為」と「技」である。

「心性」の「心」と云う者は「一一」的関係を構成する「意」と「智」である。そして、「意」には「思」と「慮」が含有されていて、「智」には「知」と「弁」が含有されている。

「心性」の「性」と云う者は「一一」的関係を構成する「情」と「慾」である。そして、「情」には「愛」と「憎」が含有されていて、「慾」には「欲」と「惡」が含有されている。

島田 沢

・軀は身・生を以て立つ。而して、生は氣液、身は骨肉である。氣は温と動、而して、温には營・衛あり、動には息・脈がある。液は血と膏、而して血には津・血あり、膏には脂・髓がある。肉は臓と腑、而して臓腑はおのおの内外に分れる。骨は筋と骨、而して筋骨もまたおのおの内外に分れる。混氣は神である。神は意・為を以て成る。而して意はすなわち心性、為はすなわち為技である。心は意と智、而して意には思・慮があり、智には知・弁がある。性は情と慾、而して情には愛・憎があり、慾には欲・惡がある。

（『三浦梅園』・「日本思想大系」本・岩波書店刊・三四九頁下）

「資料一」で明らかな様に、梅園は先ず、「統一態」としての「人間」を「精神」と「肉体」に「一即一」的に分割する。次に、「混成態」としての「生」を「氣」と「液」に「一即一」的に分割し、「混成態」としての「身」を「骨」と「肉」に「一即一」的に分割し、更に、「氣」を「温」と「動」に「一即一」的に分割し、「液」を「血」と「膏」に「一即一」的に分割する。

次に、「混成態」としての「肉」を「臓」と「腑」に「一即一」的に分割し、「骨」を「筋」と「骨」に「一即一」的に分割する。

次に、「混成態」としての「神」即ち「精神」を「意」と「為」に「一即一」的に分割し、更に、「意」を「心」と「性」に「一即一」的に分割し、更に、「心性」の「心」を「意」と「智」に「一即一」的に分割し、「心性」の「性」を「情」と「慾」に「一即一」的に分割し、更に、「情慾」の「情」を「愛」と「憎」に「一即一」的に分割し、「慾」を「欲」と「惡」に「一即一」的に分割する。

但し、「資料一」と「図版番号一三〇」の「混気体図」とは一致しない部分も有る。故に、読者は自力で新しい「玄語図」を作成しながら『玄語』を読破する必要がある。故に、此の作業を怠ける者に対しては、『玄語』は決して其の者に対して門戸を開かないであらう。

註イ・「息」ナル者ハ、「天氣」ヲ「肺」ニ引キテ、而シテ、「一身」ヲ「衛」シ、其ノ「氣」ハ「循環」

シテ、又タ、「鼻」ニ出ズ。

「食」ナル者ハ、「地氣」ヲ「肝」ニ運ビテ、而シテ、「一身」ヲ「營」シ、「滓汚」ハ「便溺」ト
為リテ、而シテ、之ヲ「膀胱」ニ送ル。

『梅園全集』上卷（二七三頁下）―（二七四頁上）

「身生」の「身」に関して、梅園は次の様にも解説している。

註ロ・ 蓋シ、夫レ、「人」ノ「身」タル、「気液骨肉」ナリ。

「気」ハ「温」ト「動」ヲ分チ、

「液」ハ「膏」ト「血」ヲ分チ、

「骨」ハ「筋」ト「骨」ヲ分チ、

「肉」ハ「臓」ト「腑」ヲ分ツ。

（『梅園全集』上卷・二五九頁下・十一行目）

「註・ロ」は、「資料」の「気」ナル者ハ「一温一動」ナリ。

「液」ナル者ハ「一血一膏」ナリ。

「骨」ナル者ハ「一筋一骨」ナリ。

「肉」ナル者ハ「二臓一腑」ナリ。

に対する註釈の役割を果たしてくれる。つまり「二」的「氣」が「一即一一」の「条理」に従って「一一」的「温」と「動」に分割され、「二」的「液」が「一即一一」の「条理」に従って「一一」的「血」と「膏」に分割され、「二」的「骨」が「一即一一」の「条理」に従って「一一」的「筋」と「骨」に分割され、「二」的「肉」が「一即一一」の「条理」に従って「一一」的「臓」と「腑」に分割されると云う形式で、「人体」の「条理」的姿を描いたものである。

此の「第四章」で問題になっている「臓腑」は、梅園の「条理学」的分類に依れば、「図版番号二三〇」「混気体図」の第三象限に展開されている。

梅園は、『玄語』の中で、「臓腑」を其の機能的側面から次の様に定義する。

「資料二」

・「臓」ナル者ハ「氣」ヲ「藏」ス。故ニ、「内」ハ「実」ス。
「腑」ナル者ハ「物」ヲ「納」ル。故ニ、「内」ハ「虚」ス。

(『梅園全集』上巻・二七三頁下)

高橋沢

・「臓」と云う者は「氣物」の「氣」を收藏する。故に、其の「内部」は「充実」している。
「腑」と云う者は「氣物」の「物」を収納する。故に、其の「内部」は「空虚」である。

島田訳　・臓は（無形）の氣を蔵する。ゆえに内が実している。腑は物を納める。ゆえに内は虚である。

（『三浦梅園』・『日本思想大系』本・岩波書店刊・三六七頁上）

「資料二」は「条理語」のみで構成されているので、単純に翻訳する事は困難である。しかし、人間の「肉体」の部分の集合としての「臓腑」の定義を参照すると、読者にも、やや明白になる事であろう。

註ハ・是ノ故ニ、「腑」ナル者ハ「物」ヲ「納」ムルノ名ニシテ、「皮」ノ別名ヲ為ス。

「臓」ナル者ハ「氣」ヲ「蔵」ムルノ名ニシテ、「肉」ノ別名ヲ為ス。

『梅園全集』上卷（二五九頁下）―五行

「資料三」

・「臓」ナル者ハ、「心肺肝腎」「耳目鼻舌」ナリ。皆、上向ス。

「腑」ナル者ハ、「咽胃腸脾」「手足陰乳」ナリ。皆、下向ス。

『梅園全集』上卷（二七四頁上）

高橋訳

・「臓」と云う者は、「心臓」と「肺臓」と「肝臓」と「腎臓」と耳と目と鼻と舌である。（此の八種類臓器は）悉く上を向いている。

「腑」と云う者は、「咽喉」と「胃腑」と「腸腑」と「脬腑」と手と足と陰部と乳部である。（此の八種類の腑器は）悉く下を向いている。

（『梅園全集』上巻・二七三頁）

島田 詠

・臓は心肺肝腎、耳目鼻舌で、みな上向いており、腑は咽胃腸脬、手足陰乳で、みな下向いている。

（『三浦梅園』・「日本思想大系」本・岩波書店刊・三六七頁下）

註ニ・粲然トシテ「体」ヲ「成」ス者ハ、「一臓一腑」ナリ。各々、「内外」ヲ分チテ「二臓二腑」ナリ。「内外」ヲバ各々分カチテ、而シテ、「八臓八腑」ナリ。・・・「八臓」ナル者ハ「耳目鼻舌」「心肺肝腎」ナリ。「八腑」ナル者ハ「咽胃腸脬」「手足陰乳」ナリ。

『梅園全集』上巻（四三七頁下）『贅語』

註ホ・人ノ「活立」ハ、全テ「臓腑」ニ「成」ル。「臓腑」ハ「内外」ヲ分チテ「二臓二腑」ト「為」ル。「内外」ヲバ各々「剖析」スレバ、「四」ヲ疊ミテ「八」ト「為」ス。是レ、乃チ、人身ノ大紀ナリ。

『梅園全集』上巻（三九五頁下）

「資料四」

・故ニ、「心肺肝腎」「咽胃腸脬」ハ「内」ニ在ルノ「臟腑」ナリ。……「耳目鼻舌」「手足陰乳」ハ「外」ニ在ルノ「臟腑」ナリ。

(二七三頁下—二七四頁上)

高橋 訳

・故に、「心臓」と「肺臓」と「肝臓」と「腎臓」は、身体の内部に存在する臓器で、「咽喉」と「胃脬」と「腸腑」と「脬腑」は、身体の内部に存在する腑器である。……「耳」と「目」と「鼻」と「舌」は、身体の外部に存在する臓器で、「手」と「足」と「陰部」と「乳部」は、身体の外部に存在する腑器である。

島田 訳

・ゆえに、心肺肝腎、咽胃腸脬は、内に在る臓・腑であり、……耳目鼻下、手足陰乳は、外に在る臓腑である。

(『三浦梅園』・「日本思想大系」本・岩波書店刊・三六七頁上)

「資料三」と「資料四」と「註二」を「繋気体図」に対応させて検討すれば明らかな様に、「心肺肝腎」と「耳目鼻舌」は「臟腑」の「臓」に属し、「咽胃腸脬」と「手足陰乳」は「臟腑」の「腑」に属している事が理解出来るであろう。

故に、「島田訳」に、「心肺肝腎、咽胃腸脬は……臓・腑であり、……耳目鼻舌、手足陰乳は……臓腑である」

と翻訳しているのは、梅園哲学の本質を形成する所謂「条理」を無視した誤訳と云う事になる。更に、「原文」に「臟腑」と有つても、「高橋訳」の様に、『玄語』表記のひとつの特質である「互文」性を重視して、前者は「臟器」、後者は「腑器」と翻訳すべきである。

さて、これだけの下準備を整えた上で、難解を以て鳴る『玄語』の中から「臟腑」に関する幾つかの文章を以下に引用し、其の解読方法を演習して御覧にいれよう。

「資料五」 ・「榮体」ハ則チ「文」ナリ。

「体」ハ「臟腑」ヲ以て「成」リ、而シテ、

「臟」ハ則チ「内臟外臟」ナリ。

「腑」ハ則チ「内腑外腑」ナリ。

「内臟」ハ「上下」ヲ分チテ、「上」ハ則チ「心肺」ニシテ、「下」ハ則チ「肝腎」ナリ。

「外臟」ハ「上下」ヲ分チテ、「上」ハ則チ「耳目」ニシテ、「下」ハ則チ「鼻舌」ナリ。

「内腑」ハ「上下」ヲ分チテ、「上」ハ則チ「咽胃」ニシテ、「下」ハ則チ「腸脾」ナリ。

「外腑」ハ「上下」ヲ分チテ、「上」ハ則チ「陰乳」ニシテ、「下」ハ則チ「手足」ナリ。

（『梅園全集』上巻・二六二頁・下―二六三頁・上）

高橋訳 ・ 榮然と「条理」に従つて分立した「形・体」の「体」は、則ち、「文章化」している。

其の「体」は、「臓」と「腑」で以て形成されている。そして、「臓」は、則ち、「内臓」と「外臓」である。「腑」は、則ち、「内腑」と「外腑」である。「内臓」は「上」と「下」(の位置)に分割されて、「上」(の位置に存在するの)が心臓と肺臓である。「下」(の位置に存在するの)が肝臓と腎臓である。「外臓」は「上」と「下」(の位置)に分割されて、「上」(の位置に存在するの)が耳と眼である。「下」(の位置に存在するの)が鼻と舌である。「内腑」は「上」と「下」(の位置)に分割されて、「上」(の位置に存在するの)が咽と胃である。「下」(の位置に存在するの)が腸と脬である。「外腑」は「上」と「下」(の位置)に分割されて、「上」(の位置に存在するの)が陰部と乳房である。「下」(の位置に存在するの)が手と足である。

島田 訳

・榮体は、文である。体は臓・腑を以って成る。臓には内臓・外臓・腑には、内腑・外腑があり、内臓は上下に分れ、上は心肺、下は肝腎、外臓も上下に分れ、上は耳目、下は鼻舌、内腑も上下に分れ、上は咽胃、下は腸脬(脬は膀胱)、外腑も上下に分れ、上は陰乳、下は手足である。

〔三浦梅園〕・「日本思想大系」本・岩波書店刊・三五二頁上

◎ 高橋 註 ・ 「文章」の用例。

註・イ、「上覆下載」ノ「際」、「日月星辰」ハ「懸」リ、

「山岳河海」ハ「列」ス。

「昼夜冬夏」ハ、以テ、「成」リ、

「東西南北」ハ、以テ、「紀」ス。

「文章」ハ「粲爛」トシテ、

「万彙」ハ「鬱郁」タリ。

(『梅園全集』上巻・三二頁・下)

註・ロ、「虚実覆載」、「会易」、「物」ヲ「成」シテ、

「日月水火」、「文章」、「網緼」シテ、

「動植」、其ノ「間」ニ「成」ル。

(『梅園全集』上巻・七十頁・下)

註・ハ、蓋シ、「理」ハ其ノ「一」ヲ「一」ニシテ、「剖析」スルコトヤ窮リ無シ。

故ニ、「為成」ノ「二具」、相ヒ「網緼」シテ、「万物」ハ此ノ如ク擾擾焉タリ。

故ニ、「天地」ハ「一大圓物」ニシテ、「天」ニハ「日月」ヲ懸ゲテ、「昼夜朔望」ヲ代タニシテ、

「地」ニハ「水火」ヲ運シテ、「雲雷雨雪」ヲ施ス。

「会易」ノ「文章」ヲ「天」ニ「成」スヤ、

「天」ハ「方位」ヲ定メテ、「東西南北」ヲ「分」チ、

「地」ハ「山水」ヲ定メテ、「湖海島洲」ヲ「為」シテ、

「気物」ノ「文章」ヲ「地」ニ「成」スヤ、

「天地」ハ「乗載」シ、

「会易」ハ「綱縊」ス。

「動植」ハ擾擾トシテ、「種」ヲ「無数」ニ「分」ツ。

（『梅園全集』上巻・五九頁・上）

「資料五」に於ける「綦体」とは、「混体」に対して「一一」的關係にある「条理語」である。「図版番号一三二」の「混綦気体図」を参照すれば明らかな様に、「一一」的關係にある「身」即ち「身体」と「生」即ち「生命」の「綦立体」の事である。

「資料五」に於ける「文」とは「文章」の事、即ち「条理」的展開態の事である。

「資料五」に於ける「体ハ臟腑ヲ以テ成リ」とは、「図版番号一三二」の「綦気体図」の第一圈に有る「気体」の「体」と第二圈の「臟」と「腑」の「一一即一」的「混成態」としての「体」の部分参照すれば明らになるであらう。

「資料五」に於ける「臟ハ則チ内臟・外臟ナリ」とは、第二象限の第三圈の「内臟」と「外臟」を意味する。「腑ハ則チ内腑・外腑ナリ」とは、第三象限の第三圈の「内腑」と「外腑」を意味する。

「資料五」に於ける「内臟ハ上下ヲ分チテ」とは、第二象限の第四圈の「居上」と「居下」である。「居上」とは人

間の「体軀」即ち身体の横隔膜より上部に位置する空間に居住し存在する事を意味し、「居下」とは横隔膜より下部に位置する空間に居住し存在する事を意味する。

「資料五」に於ける「上ハ則チ心肺ニシテ、下ハ則チ肝腎ナリ」とは、第二象限に於ける第五圈の「心・肺」と「肝・腎」と云う所謂「内臓」を意味する。

「資料五」に於ける「外臓ハ上下ヲ分チテ」とは、第二象限の第四圈の「居上」と「居下」である。「居上」とは人間の顔面の上部に存在し、「居下」とは其の下部に存在する事を意味する。

「資料五」に於ける「上ハ則チ耳目ニシテ、下ハ則チ鼻舌ナリ」とは、第二象限に於ける第五圈の「耳・目」と「鼻・舌」と云う所謂「外臓」を意味する。

「資料五」に於ける「内臓ハ上下ヲ分チテ」とは、第三象限の第四圈の「居上」と「居下」である。「居上」とは人間の「体軀」即ち身体の横隔膜より上部に位置する空間に居住し存在する事を意味し、「居下」とは其の下部に存在する事を意味する。

「資料五」に於ける「上ハ即チ咽胃ニシテ、下ハ則チ腸脬ナリ」とは、第三象限に於ける第五圈の「咽・胃」と「腸・脬」と云う所謂「内臓」を意味する。

「資料五」に於ける「外臓ハ上下ヲ分チテ」とは、第三象限の第四圈の「居上」と「居下」である。「居上」とは人間の「体軀」即ち身体の横隔膜より上部に位置する空間に居住し存在する事を意味し、「居下」とは其の下部に存在する事を意味する。

「資料五」に於ける「上は即ち陰乳にして、下は即ち手足なり」とは、第三象限に於ける第五圈の「陰・乳」と「手・

足」と云う所謂「外腑」を意味する。

〔資料六〕

・是ヲ以テ、「神本」ノ「氣」ハ「上下」ノ「体」ニ「居」リ、

「精粗」ノ「氣」ハ「内外」ノ「体」ヲ「雜」ユ。

是ニ於テ、「肺肝心腎」「耳目鼻舌」ハ「保運化持」「視聽交味」シ、「咽胃腸脬」「手足陰乳」ハ「納畜收送」「舞踏交字」ス。

「上体」ヲバ「臟」ト為シ、「下体」ヲバ「腑」ト為ス。

「臟腑」ニハ、各々、「内外」有リ。

「内臟」ノ「中」ハ則チ「心」ニシテ、「端」ハ則チ「腎肺肝」ナリ。

「外臟」ノ「中」ハ則チ「舌」ニシテ、「端」ハ則チ「鼻耳目」ナリ。

「内腑」ノ「中」ハ則チ「胃」ニシテ、「端」ハ則チ「咽腸脬」ナリ。

「外腑」ノ「中」ハ則チ「陰」ニシテ、「端」ハ則チ「乳手足」ナリ。

「神氣」ハ「神」ナリ。

「本氣」ハ「天」ナリ。

而シテ、

「神」ト「本」トニハ、各々、「内外」有リ。

「内神」ハ「精」、以テ「神本」ノ「氣」ヲ「運持」シ、

「粗」、以テ「天地」ノ「氣」ヲ「保化」ス。

「外神」ハ「精」、以テ「声色」ヲ「視聽」シ、

「粗」、以テ「臭味」ヲ「聞味」ス。

「内本」ハ「精」、以テ「水穀」ヲ「納畜」シ、

「粗」、以テ「便溺」ヲ「收送」ス。

「外本」ハ「精」、以テ「配嗣」ニ「交字」シ、

「粗」、以テ「器地」ニ「舞踏」ス。

（『梅園全集』上卷・二六八頁・下）

高橋沢 ・ 此の様な訳で、「神氣」と「本氣」の二種類の「氣」は、「上体」と「下体」と云う二種類の存在

空間に於いて居住する。

「精氣」と「粗氣」の二種類の「氣」は、「内体」と「外体」と云う二種類の存在空間に於いて交雑する。

此の様な存在空間の中で、「肺」は「保」と云う作用を為し、「肝」は「化」と云う作用を為し、

「心」は「運」と云う作用を為し、「腎」は「持」と云う作用を為す。

「耳」は「聴」と云う作用を為し、「目」は「視」と云う作用を為し、

「鼻」は「聞」と云う作用を為し、「舌」は「味」と云う作用を為す。
「咽」は「納」と云う作用を為し、「胃」は「畜」と云う作用を為し、
「腸」は「収」と云う作用を為し、「脬」は「送」と云う作用を為す。
「手」は「舞」と云う作用を為し、「足」は「踏」と云う作用を為し、
「陰」は「交」と云う作用を為し、「乳」は「字」と云う作用を為す。

註へ ・ 「図版番号一三三」に依れば、「手」の機能は「握」に、「足」の機能は「歩」になっている。

◎

註ト

・ 「一」ニ「酬酢黜抄」ト曰ヒ、「二」ニ「取舍予奪」ト曰ヒ、
「一」ニ「握 歩」ト曰ヒ、「二」ニ「舞 踏」ト曰ヒ、
「一」ニ「言 行」ト曰ヒ、「二」ニ「言 動」ト曰ヒ、
「一」ニ「云 為」ト曰フハ、
則チ、

「声主」ハ、同ジカラズシテ、而シテ、其ノ帰スルヤ「二」ナリ。

（『梅園全集』上巻・八頁下）

島田 訳 ・ それゆえ、神氣本気は上体下体に居り、精なる氣、粗なる氣は内体外体の區別をしない。ここに
おいて、肺肝心腎、耳目鼻舌は保運化持、視聴聞味し、咽胃腸脬、手足陰乳は納蓄収送、舞踏交

字する。上体は臓、下体は腑であり、而して臓腑にはそれぞれ内外がある。内蔵は、中（＝中心）は心、端（＝末端）は腎肺肝であり、外臓は、中は舌、端は耳鼻目である。内腑は、中は胃、端は咽腸脬であり、外腑は、中は陰、端は乳手足である。神氣は神、本氣は天、である。而して、神本それぞれ内外がある。内神は、精なるものは神本の氣を運持し、粗なるものは天地の氣を保化する。外神は、精なるものは声色を視聴し、粗なるものは聞味する。内本は、精なるものは水穀を納蓄し、粗なるものは便溺を收送する。外本は、精なるものは配嗣に交字し、粗なるものは器地に舞踏する。

（『三浦梅園』・「日本思想大系」本・岩波書店刊・三六〇頁上）

◎ 高橋註

・「神氣本氣」は、「島田訳の慣例」に従えば、「神氣・本氣」とすべきである。「上体下体」も、「島田訳の慣例」に従えば、「上体・下体」とすべきである。

註チ ・また或る文脈に於いては「握歩」と表現する。「舞踏」とは「手の舞い、足の踏むところを知らず」と云う意味での「舞踏」である。「資料六」の原文では「器地に舞踏す」となっているにもかかわらず、「翻訳では「握る」と訳したのは「器」と「舞う」の馴染みが悪いからである。「器物」に対する「手」の機能は「舞う」事では無く、「握る」事の方が馴染みが良い。故に、ここでは敢えて「器物を握る機能を果たさせる」と訳してみた。

註り

・「図版番号一三三」の「衆気体図」では、「舞踏」とある筈の部分が「握歩」となっている。故に、此れに従えば、此の一節は「(手に) 器物を握る機能を果たさせ、(足に) 大地を歩く機能を果たさせる」となる。